

研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2008～2012
課題番号：20402054
研究課題名(和文)小規模校にオルタナティブ教育を導入する教育効果に関する国際協同研究
研究課題名(英文)The international cooperative study on educational effect
to introduce alternative education into some rural small schools
研究代表者
伏木 久始(FUSEGI HISASHI)
信州大学・教育学部・准教授
研究者番号：00362088

研究代表者の専門分野：社会科学A

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：小規模校，オルタナティブ教育，個に応じた教育，複式学級

1. 研究計画の概要

(1)研究の目的

本研究は、全校児童生徒数や教職員数がきわめて少ない小規模校を対象に、少人数であるがゆえの長所を最大限に生かし、短所と考えられてきた教育条件を克服するための教育方法を、海外のオルタナティブ教育の発想を導入し、地域に応じて開発することを目指している。特に、研究代表者が学校改革の指導者として携わっている長野県の僻地校群と、北欧諸国の僻地校の教職員および僻地教育をテーマに研究している北欧の研究者との連携体制を構築しながら、一斉画一式授業に代わるオルタナティブ教育を小規模校に導入する教育効果を明らかにすることを本プロジェクト研究の目的としている。

(2)研究の体制

本研究は研究代表者が北欧諸国の研究協力者とのネットワークを生かして連携体制をとり、長野県内の僻地指定地域の教育委員会および学校関係者と協力して具体的な実践を試行する体制を整えている。

(3)研究の方法

- ①小規模校・小規模学級および複式学級での学習指導に関する先行研究を整理する。
- ②学習スタイル論の最新動向を整理する。
- ③北欧諸国およびオランダの教育実践をオルタナティブ教育の観点から分析する。
- ④長野県内の僻地校の教育改革に参画しながら、北欧流の教育実践の導入が適切な部分に積極的にその学習スタイルを指導する。
- ⑤僻地としての条件を共有する北欧と長野の協力校におけるオルタナティブ教育の意義と教育効果に関して教員および子どもを対象とした意識調査を行う。

2. 研究の進捗状況

(1)オルタナティブ教育の事例分析

一斉画一式授業に代わるオルタナティブとしての学習スタイルの意義と課題を、国内外の学校参観や文献調査を通じて考察してきた。具体的には、オランダのイエナ・プラン校やスウェーデンのヴィットラ校、フィンランドのトゥルクおよびラウマの僻地校に加え、ユバスキュラ郊外の山村エリアの小規模校での実践を参観取材し、その一部を学術論文に発表した。

(2)オルタナティブ教育に関する文献研究

僻地小規模校での複式学級の教育方法や“個に応じた教育”のための教育方法に関する先行研究のレビューを行った。この中には、個性と協同性の両方を重視しながら自己学習能力を高めようとするイエナ・プランやモンテッソーリ・メソッドに関する文献の翻訳作業も含まれている。

(3)長野県内の僻地校の学校改革への参画

長野県の栄村および信濃町という山間僻地の学校群に出向き、カリキュラムや学習指導の改革に指導者として参画している。単なる学力向上事業としてではなく、自ら意欲的に問題解決に取り組む子どもたちの自己学習能力を育てるために、その人的ネットワークと教職員の研修のあり方について提言してきた。

(4)オルタナティブ教育に関わる啓蒙活動

出前講座や校内研修会での講演の際には北欧諸国の教育実践の特徴を具体的に紹介しながら、学校の中に求められる真のゆとりや教員の主体性・独創性、および学習者の目線に立って問い直す学習指導という話題を提供し、一人ひとりの個に応じた教育に近づ

けるためにオルタナティブ教育を導入することの必要性を指導した。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている

(理由)

北欧を中心とする海外のオルタナティブ教育の取材に関してはおおむね順調に進展しているが、国内の小規模校にオルタナティブ教育を導入する計画に関しては、予定より遅れ気味である。その主な理由は二つある。

当初の計画では、小規模校にオルタナティブ教育を導入する手立ての一つとして、文部科学省の推進施策に合わせて電子黒板を活用するという方針で臨み、初年度に3台の電子黒板を購入し長野県内の僻地校に設置した。しかし、予算の関係もあり電子黒板を天井吊りのプロジェクタとセットに設置できなかったことや無線LAN工事と合わせた設備投資までをカバーできなかったことが原因で、僻地校の教員にとって必ずしも日常的に使いやすいツールになっていない点の一つ目の理由である。国内の僻地校における教育方法の刷新プランが遅れているもう一つの理由は、僻地校ほど教員の人事異動のスペンが短く、教員研修を重ねて指導しても、毎年三分の一程度の職員が替わってしまうために、なかなかオルタナティブ教育の導入が進展しないという点である。

さらに、今後の研究の進展にとってのマイナス要因は、本研究の国内対象地である栄村の学校群が、3月の東日本大震災により校舎内外に甚大な被害を受け、復旧作業の途中段階にあるという事態に対処しなければならないことにある。

4. 今後の研究の推進方策

(1)計画の変更

栄村の3つの小学校が平成23年4月より統廃合により2校になったこと、震災被害でインフラが復旧していないこと等を勘案し、電子黒板を活用した視覚教材の開発と海外の協力校との教材情報の交換という予定は延期し(本研究の具体的内容からは除外し)、本研究の終了期間までの今後2年間では、小規模校におけるカリキュラム開発の協同研究と、複式学級の学習指導法の情報交流という内容に変更して、当初の目的の実現に向けてこれまでの研究成果を生かしながら研究を進展させていく。

(2)海外のオルタナティブ教育の取材

これまでの調査を通して構築してきた研究協力ネットワークを生かしつつ、平成23年度にはノルウェーの教育現場にもフィールドを広げ、僻地校での有効な学習スタイルを取材し、平成24年度の北欧教育学会にて研究成果を発表する。

(3)国内のオルタナティブ教育の推進

研究代表者は、これまでサポートしてきた栄村に加え、同じ長野県の僻地指定地域である信濃町および両小野地区の学校群の小中一貫教育の指導をそれぞれ担うことになったが、本研究の方向性はこれらの取り組みに直結するものであり、科研費プロジェクトが社会貢献につながる機会として取り組む。

・小規模校にオルタナティブ教育を導入するための主な啓蒙活動の機会は以下の通り。

- ① 信州大学出前講座
- ② 信州大学教育学部附属の各校(長野小学校・長野中学校・松本小学校・松本中学校)の授業研究の指導講師
- ③ 各地区の指導講師(栄村教職員会、信濃町教職員会、両小野地区教職員会、上高井郡教職員会、長野市櫻ヶ岡中学校、文化学園長野高等学校)
- ④ 長野市社会教育委員
- ⑤ 長野県キャリア教育推進委員

5. 代表的な研究成果

[雑誌論文](計7件)

- ① 伏木久始, フィンランドの教員養成の質を保証する要因, 信州大学教育学部研究論集, 第4号, 2011, 25-38, 査読有
- ② 伏木久始, 複式学級の教育効果を生かした教育実践の可能性—スウェーデンのヴィットラ・スクールの「個に応じた教育」を事例として—, 個性化教育研究, 第2号, 2010, 14-23, 査読有
- ③ 伏木久始, 協働的な学びの指導者を養成するデンマークの教員養成, 信州大学教育学部研究論集, 第3号, 2010, 115-126 査読無
- ④ 伏木久始, 地域の学校での職場体験と大学での演習を連携させる授業の教育効果, 日本教師教育学会年報, 第18集, 2009, 108-117, 査読有

[学会発表](計6件)

- ① 坂田哲人, 中田正弘, 伏木久始, Teacher Quality Assurance on Pre-Service Teacher Education, Annual Congress of the Nordic Educational Research (北欧教育学会: 第39回大会), 2011.3.10, Jyväskylä University(Finland)
- ② 伏木久始, イエナ・プラン校の学習スタイルで育まれる社会性と主体性の実相, 日本教育方法学会, 2008.10.11, 愛知教育大学

[その他]

研究代表者の研究業績→機関リポジトリ
<http://soar-rd.shinshu-u.ac.jp/profile/ja.jhleWhLe.html>